近代建築草創期の原始性追求：英国の事例を端緒として

杉山真魚

1. はじめに

近代建築の成立には、過去の様式からの脱却と科学技術の進展とが大きく関与した。過去と決別し新しい表現を求めるウィーン分離派や、テクノロジーを礼賛するイタリア未来派の出現はこれらの側面を象徴している。近代建築史という枠組みにおいては、通例、意匠や構造といった建築物自体の特性に基づいて建築の新奇性が叙述されるが、本稿では近代建築草創期に原始的なものへの眼差しがあったことに注目する。社会の諸局面において近代化が推進される中で、建築に関わる思想や作品には、新奇的な表現を試みたり、新技術を応用したりしながらも、過去への視線をもつものが散見される。それは特定の時代の建築様式に見られる装飾や構造を復古・模倣しようとするものではなく、大過去とでも言うべき、建築や宗教の原始的なあり方を追求するものである。こうした傾向が生まれてくる社会的動向に着目しながら、原始性への眼差しが建築における新機軸を誘引するプロセスを明らかにできれば有益である。本稿はこのような動機に基づく、言わば「外からの建築論」[1]の試みである。

原始的なものをめぐる議論は近代建築に特有ではなく、例えばイエズス会の司祭であったロジエ（Marc-Antoine Laugier, 1713-69）は、バロック様式後の混迷状況を打破するべく『建築試論』（1753）において「原始の小屋」という考え方を提示した。素朴な住まいを構成する自然のままの樹木、横架材、屋根組が古代神殿の円柱、エンタブラチュア、ペディメントの原初形態であると解釈し、新古典主義という新しい様式の美の基準に応用した。ここでは、反宗教改革の旗印のもと、古典的なものを評価するために原始的なものの自然性が理想化されている。近代建築草創期において原始性が追求されたことにも何らかの背景があり、分離派や未来派が志向する新奇性あるいは近代性のベクトルと重なる部分があることが予見される。それはどのような理論に基づいていたのだろうか。本稿では原始性の諸相について、英国の事例とりわけ

アーツ・アンド・クラフツ運動に関連する著作を通して素描するとともに日本の近代建築との関係性を探ってみたい。

2. 中世主義からの展開

1)アーツ・アンド・クラフツ運動以前[2]

社会思想家カーライル(Thomas Carlyle, 1795-1881)、建築家ピュージン(Augustus Welby Northmore Pugin, 1812-52)、芸術批評家ラスキン(John Ruskin, 1819-1900)は近代化される当時の状況を無秩序であると批判的に捉え、中世社会を理想化して騎士道精神やキリスト教の宗教的精神を復古しようとした。

カーライルは産業革命からヴィクトリア朝への過渡期に『衣服哲学』(1836)において「装うために生きる」という美学的態度を批判した。『英雄崇拝論』(1841)では歴史は利害を超越した英雄的決断を通して進行し、道徳的資質をもった新たな貴族階級によって産業の封建制が確立されるとした。『過去と現在』(1843)ではこのことをレッセフェールを基礎とする産業資本主義と対照させた。カーライルが産業構造を外側から暴く態度をとる一方で、ピュージンは内側から実践的建築家として変革を促す。『過去と現在』に見られるような対照的図式を建築や装飾芸術の問題として『対比』(1836)という著作によって示した。ピュージンはゴシック様式の形態の内在原理を考究し、例えば、アーチについてカトリック信仰の証として高さを判断基準とし、半円形よりも尖頭形の方が宗教的な目的に対応することが主張される。『尖頭形すなわち教会建築の真の原理』(1841)では、ゴシック建築から導かれる「デザインの二大原理」として、第一原理、すなわち「便利さ、構造、適切さの観点から見て必要性のない特徴を有してはならない」、および第二原理、「すべての装飾は建物の本質的構造を豊かにするべきものとして存在するべきである」がそれぞれ示される[3]。

カーライルやピュージンにより提示された宗教の時代としての中世というヴィジョンを、ラスキンは建築やそれに付随する装飾芸術に携わる工人の問題として継承した。ラスキンは「中世主義」(medievalism)という言葉を造った人物としても知られる。主要著作として、『近代画家論』(1843-60)、『建築の七燈』(1849)、『ヴェニスの石』(1851-53)等が挙げられる。『ヴェニスの石』の中で、ゴシック建築の特徴的な道徳的要素として、重要度の高い順に、1.野蛮性(Savageness)、2.多様性(Changefulness)、3.自然

主義（Naturalism）、4.怪奇性（Grotesqueness）、5.剛直性（Rigidity）、6.過剰性（Redundance）が挙げられる[4]。ラスキンは社会の質が工人の仕事の質を規定し、それが芸術に表象されると考える。「野蛮性」等の言葉によって捉えられるのは「石材を彫る職人の生命と自由」である[5]。こうした職人の生命や自由といった道徳性への着眼がアーツ・アンド・クラフツ運動の主導者モリス（William Morris, 1834-96）へ受け継がれている。

2）モリスと聖ソフィア聖堂

中世主義の先人達は過去と現在を比較して過去回帰的にゴシック期の芸術を賛美したと言えるが、モリスの関心は中世を現代ひいては未来に創造的につなぐことにあったと考えられる。彼の初めての公開講演の題目は「装飾芸術―その近代生活および進歩との関係」（1877）であり、日常生活を彩る些細な装飾芸術の歴史や意義が論じられている。当講演の中で、装飾芸術の問題は「大産業の問題であり、世界史の大部分を占めると同時に世界史研究の非常に役に立つ手段となる」と、装飾芸術の射程を広く捉える必要性が示される[6]。論考「パタンデザインの歴史」（1879）ではより具体的にパタンデザインという事例を扱いながら装飾芸術に即して世界史が叙述されている。当該論考には数多く建築の話題が出てくるが、これはファーガソン（James Fergusson, 1808-86）の『世界建築史』（第1巻：1865、第2巻：1867）の記述を底本としていると推測される[7]。本稿では、ここに記されているモリスの歴史観に注目したい。モリスは「私は近代芸術という言葉によってヴィクトリア朝の芸術を意味しない」とし、近代芸術の根拠をコンスタンティノープルの聖ソフィア聖堂の時代に求めた。

> 聖ソフィア聖堂は過去に縛られていないが、過去に存したものの中から、生きかつ新しい生命を生み出すために適合するものをすべて集めた。それは生きている子であり、人の技と過去と未来から多くを生み出す母である。[8]

聖ソフィア聖堂はユスティニアヌス1世の命により6世紀前半に建設されたビザンチン建築である。モリスは聖ソフィア聖堂の建設から16世紀にサン・ピエトロ大聖堂の再建が始まるまでの千年間を「世界の建設時代と呼ばれてしかるべきである」[9]と高く評価した。サン・ピエトロ以降は普通の人間が巨匠の仮面をかぶって制作した「もっ

たいぶっているだけでどうにもならないガラクタの山」[10]として非難した。モリスはルネサンスからヴィクトリア朝芸術を括弧に入れて、現在を中世の千年間に接続することを提起している。また、その起点に聖ソフィア聖堂が位置づけられ、各種芸術の伝統と発展に関与してきた様態が生命体になぞらえられている。中世芸術の原動力や原理を見定め、それを近代芸術さらには未来の芸術にも適用しようとしたのである。第1回講演の題目に「進歩」という用語が見られるが、単なる進歩史観を示すものではなく、中世を振り返りながら螺旋的に発展させることが含意されていると言えよう[11]。

3)モリスと社会主義

モリスは現在の制作の糸口を過去に見出すという方法を中世主義の影響下で体得したと考えられる。1880 年代に社会主義者を名乗るようになってからは、中世という時代の限定がなくなる。1884 年の論考「建築と歴史」では、古建築物について具体的に言及する前に、アカデミーの歴史家が示す衒学的な歴史の世界は真実性のないものであるとし、「より初期の秩序は決して死なず新しいものの中で生きる」と、ドイツ観念論における自然哲学に見られる有機体の生成原理を芸術の歴史的発展に応用させている[12]。「より初期の秩序」は先に見たような中世の起点において芸術が繁茂している社会状態を指すわけではない。もっと根本的な問題が問われている。社会主義機関誌『コモンウィール』に連載された夢物語『ジョン・ボールの夢』(1888 出版)では、「アダムが耕しイヴが紡いだ時、ジェントルマンなどいたであろうか」という文言が書かれた絵(図 1)を物語の核心部分に登場させ、「原初世界と、人間の自然との最初の闘争を象徴するこの絵」と説明している[13]。「ジェントルマン」を生む資本主義体制への批判として、人類の「原初世界」まで遡源し、土を耕して食物を育て、糸を紡いで衣服を作るという日常生活の意味や共同体のあり方がラディカルに問われている。過去への視線が人類の原点にまで延長されたと言える。しかしそれは原始生活に還るといったことではなく、「原初

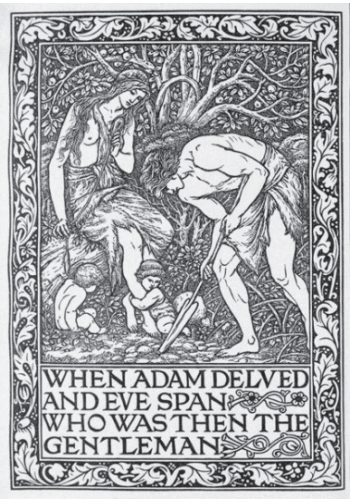

図 1 『ジョン・ボールの夢』扉絵

世界」の秩序や道徳と考えられるものを現在にフィードバックしてものづくりや社会を正常化することを目的としている。

モリスはバックス（Ernest Belfort Bax, 1854-1926）と共著で「根源からの社会主義」（1886-88）と題した論文を『コモンウィール』に連載し、社会主義の視座から見た歴史を叙述している。1893 年には加筆修正して『社会主義―その成長と帰結』という著書にまとめられた。著書の第 1 章「古代社会」の中で、「原始社会の宗教は偏在するアニミズムと結びついた祖先宗教であり」、自然からはるかに離れてしまった現代人には理解できないものであることが指摘される。ここでは、「アニミズム」は「生物であれ無生物であれ、世界の万物に人間の意思や意識が備わっているという観念」と説明されている[14]。「アニミズム」はモリスの同時代人で文化人類学の父として知られるタイラー（Edward Burnett Tylor, 1832-1917）が『原始文化―神話、哲学、宗教、芸術、風習の発展に関する研究』（初版、1871）の中で提示した概念であり、モリスらは当時の学術的動向に目配りしながら社会主義の理論を構築しようとしていたと考えられる。『社会主義―その成長と帰結』では、「現在の野蛮な人々と初期の歴史上の民族とのあいだには、本質的な差異はありえないのだろうか」と、一部の人類学者が両者の状態を同一視することに対して疑問を呈している[15]。ここで論じられている「野蛮」はラスキンが『ヴェニスの石』で称揚したようなものではなく、文明が未発達の状態を指す人類学の用語である。「初期の歴史上の民族」とは、いわゆる四大文明の勃興を経て地中海の東部沿岸に住まうようになった古代ギリシア民族を指し、「もっとも冒険的で進歩的な種族」や「都市生活の発展のもっとも典型的な例」とも表現されている[16]。古代ギリシアに端を発する西洋文明に基づく民族を当時の野蛮な人々、すなわちヨーロッパの人々によって発見された未開の人々と対置する記述はモーガン（Henry Lewis Morgan, 1818-81）による『古代社会』（1877）における主張と重なっている[17]。西洋文明至上主義とまでは言えないが、西洋を他と区別する考え方をモリスとバックスが共有していたことが分かる。

このように文明と野蛮の対立構図の中で西洋文明を上位に見る傾向には、ラスキンらの中世主義が前提とするキリスト教が背景にあると考えられるが、モリスが「なぜいけないのか」（1884）という論考の中で「社会主義の宗教」[18]というフレーズを用いて、富の平等な分配によってより良い社会を実現する必要性を説いていることやバックス

に『社会主義の宗教』(1885)という著作があることを踏まえ、モリスにとってキリスト教あるいは宗教とはどのような意味を持っていたのか確認したい。

4)モリスとキリスト教

タイラーの理論の背景にはダーウィン(Charles Robert Darwin, 1809-82)やスペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)の種の進化や社会の発展に関する議論があることを本人が認めている。ダーウィンの『種の起源』(1859)が契機となり、諸々の起源と発展を科学的に分析することに人々は駆り立てられた。タイラーもその一人であろう。「根源」や「成長」を描くモリスらの著書にもその影響がうかがえる。また、人類の起源についての科学的説明がキリスト教を相対化することにつながったのも周知のことである[19]。しかし、先に取り上げた図 1 について、「原初世界」を説明するのにアダムとイヴが最初の人間として描かれていることを看過してはいけないだろう。キリスト教の世界観を介在させながら原始性が説かれおり、原始時代においても西洋文明を中心として捉える態度であると言える。

モリスは福音派の家庭に生まれながらも、富者の国教支持的雰囲気に違和感を覚えていたようであり、無神論者(atheist)や非キリスト教徒(pagan)を自称していたという証言もある[20]。しかし、彼は「中世の神学は現在カトリック教徒やプロテスタント教徒によって理解されている宗教と同じものではない」とし、「単なる決まりきった教えではなく、本当に起こったことを述べたもの、過去、現在、そして未来の出来事を語ったものとして、すべての民衆によって本当に信じられていたのである」と中世の時代にキリスト教に帰依した人々に共感を示す[21]。モリスはそうした物語の表現された石像やステンドグラスに中世の職人達が想像力を使って様々な装飾を施していたことを読み取ったと考えられる。そして彼自身も宗教的主題を様々な意匠で表現しながら、生涯にわたって教会建築の工事や装飾芸術の制作に従事したのである。「東方三博士の礼拝」という大型のタペストリは 10 点織られるほど需要があったようである[22]。

モリスやバックスは、教条主義に陥って社会を変革する力を失った当時のキリスト教を批判し、社会主義に未来を託そうとした。彼らは社会主義を「宗教」と呼ぶが、それは比喩表現であり、中世のキリスト教を信仰した人々のように私欲や利害を捨てて信じる行為によって未来を見据える必要性を説いたのである。新しい共同体や民衆のあり方を目指し、そこで共有される新たな道徳が必要だと考えていたとも言える。

以上より、中世主義をベースとするモリスの思索は同時代の学説を吸収しながら中世芸術を生み出した道徳を重んじる、いわば芸術的社会主義へと収斂したと言える。道徳の再構築と原始性の追求とが不可分であったことが見えてくる。以下、3 節ではモリスに見られる進歩や発展への関心がアーツ・アンド・クラフツ運動の中でどう引き継がれたかを検討する。また、続く 4 節ではモリスも迫られた「宗教」の再定義という問題を扱う。

3. 進化論との接続

1）建築様式の起源

モリスはルネサンス等の古典主義様式を、形式が完全に決まっているため職人が自由に考える余地がないと考え否定的に捉えた。そして彼は中世芸術の原点として、とりわけ東方のビザンチン建築に足がかりを求めた。あくまでも建築様式史の枠組から逸脱しない範囲で、理想的な建築の根源を見極めようとしたと言える。これに対して、アーツ・アンド・クラフツ運動の第二世代の建築家と言われるレサビー（William Richard Lethaby, 1857-1931）は別の方法をとった。彼は様式の区別を不問とする進化論的アプローチをとる。ここでレサビーの略歴を辿っておきたい[23]。レサビーの父は熟練工で信徒伝道者であった。レサビーはバーンステープル美術学校卒業後、建築の道に進み、1879 年にはショウ（Richard Norman Shaw, 1831-1912）の建築事務所に入所した。設計に従事しながら、1884 年にはモリスの思想に共鳴してショウの弟子達とアート・ワーカーズ・ギルドを結成し、職人とデザイナーの交流の場を創出した。1891 年に独立し、建築設計に携わる傍ら、初めての著書『建築、神秘主義、神話』（1891）を出版した。1896 年にはアーツ・アンド・クラフツ中央学校の校長となり、1900 年には王立美術学校の教授に任命された。この時期に設計活動をやめ、教育に専心するようになる。1911 年には『建築―建物という芸術の歴史と理論への入門』、1922 年には著作集『文明における形態』が刊行された。1915 年にはデザイン産業協会（DIA）の設立にも関わった。

レサビーは『建築、神秘主義、神話』の題扉に「すべての人種、社会、国家にふさわしい、不変と呼べるようなシンボルはあるのだろうか」というフランス人建築家デイリー（César Denis Daly, 1811-94）の言葉を掲げ、序文で引用の意図をこう説明する。

著者［引用者注：デイリー］が言いたいことは、ハーバート・スペンサー氏による建築様式の起源に関する論文は彼自身が建築家でなかったために破綻しており、スペンサーがやったようなことを準備した建築家などいないということである。[24]

この引用を見る限りでは、レサビーがスペンサーに対して批判的であるように思われるが、あくまでもスペンサーの建築に関する論文の内容に疑義を持っているだけである。この論文は「建築様式の起源」（1852）と題されたものであり[25]、スペンサーが1858 年に「総合哲学体系」の構想を公表し、『第一原理』（1862）、『生物学原理』（1864-67）、『社会学原理』（1876-96）等の代表的著書を刊行する前に書かれたものである。「適者生存（survival of the fittest）」という彼の代名詞とも言える造語が発表されるのは『生物学原理』においてである。「建築様式の起源」で論述されているのは、建築様式が周囲の景観と一致（congruity）あるいは不一致（incongruity）を示すのはどのような条件下であるかということである。城の形態は険しい岩山に、切妻屋根は森林に、シンメトリーは都市に一致するといった建築家や建築史家からすると建築様式をめぐる漸進的な変化を無視した議論が展開されており、レサビーも首肯しかねる内容だったと推察される。

しかし、レサビーは基本的にはスペンサーが唱える社会進化論を肯定していた[26]。『建築、神秘主義、神話』では、スペンサーの「原始人は偶然の改変によってのみ新奇なものへと逸脱する。今や誰もが知っている通り言語は発明されるものではなく進化するものだ」という原始的状態から偶然的に進化する過程を説明する言葉を引用し、「建築史家は継続する時代におけるいくつかの様式や流派の違いを強調するのが習慣となっているが、もっと大局的に見れば、諸文明の流れを遡ってみれば様式が後に続いたり影響したりしているのだから、すべての建築はひとつであるということだ」と進化の源流を研究する方向性が冒頭に示される[27]。そして、建築に形態を与える究極の事実として、「第一に、人間が似通った要求と欲求を持つこと。第二に、構造的側面、すなわち材料に負う必要性とそれらを組み立て、組み合わせる物理的法則。第三に、様式的側面、すなわち自然」の三者が挙げられる[28]。レサビーは、スペンサーが専門性の欠如ゆえに言及できなかったと思われる「様式的側面」に注目し、題扉

にある「不変と呼べるようなシンボル」について西洋文明に限らず、タイラーらによる人類学の知見や仏教等の東洋の話題を織り交ぜながら論述している。章題を挙げれば、「I. 世界の構造 II. 小宇宙 III. 四角形 IV. 地球の中心 V. 聖樹 VI. 惑星に似た球体 VII. 迷宮 VIII. 太陽の金門 IX. 海に似た舗装 X. 空に似た天井 XI. 天国の窓と360日」となっている。

2)デザインの起源

19 世紀末、アーツ・アンド・クラフツ運動の実践家達は上述の建築様式の他にも、種々の起源を問う論考を残している。レサビーと同じくアート・ワーカーズ・ギルドの創設に関わったクレイン（Walter Crane, 1845-1915）は建築よりも広範にわたるデザインが古来どのように発展してきたか、『デザインの基礎』（1898）で体系化を試みている。デザインに影響を及ぼす基礎的要因を10項目掲げ、それぞれ図版とともに解説するという内容になっている。「起源」や「進化」等の用語も随所に見られる。章立ての順番に 10 項目を示せば、「I. 建築的基礎、II. 実用性、III. 素材と方法、IV. 条件、V. 気候、VI. 民族、VII. 象徴、VIII. 写実、IX. 個人、X. 集団」である。「条件」とはデザインが適用される場所の寸法等を指す。本書の装丁および標題紙には図 2 のようなドローイングが描かれている。これは系統樹のように分岐に意味があるわけではないが、根で囲まれた要因がどの深さに位置するかは、章構成と符合しており、より根源的な要因が先に論述されるとともに図の下方に配されていると考えられる。最深部に「建築的基礎」を据えているのは諸芸術を総合する役割をもつ建築に対して特に意義を見出すアーツ・アンド・クラフツ運動の基本的姿勢を示していると言える。『デザインの基礎』の意図が次のように述べられる。

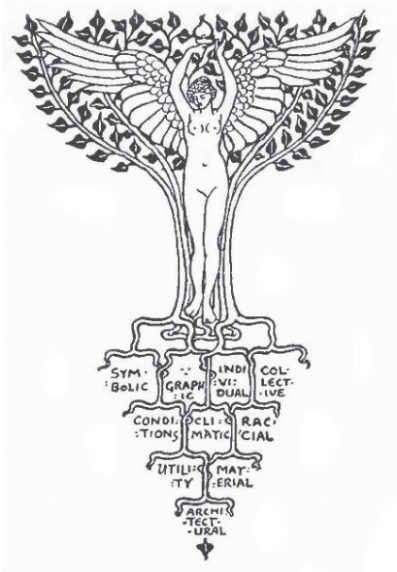

図2 『デザインの基礎』挿図

私の主たる目的は、デザインという芸術を生命として維持する血管や神経の関係にあたるものを突き止めることである。それは、主幹から出る樹液が、連結し集合した根から地面へと湧き出し生きている樹木を有機的全体として維持し統合するようなものである。[29]

クレインはデザインを要素に分解することを目的としているのではない。「血管」や「神経」等の用語とともに芸術を生物に例えながら捉えられるのは、諸要素が有機的に連関している様態である。図 2 における地上の樹木と女神こそデザインを意味し、基礎的要因を把握しながら、それらを絡み合わせてデザインを現出させることが描かれているのである。デザインの要素をいわゆる様式の分類ではなく、様式以前の起源的要因によって弁別するという方法は、象徴と写実、個人と集団といった既知の二元論的把握を超えて、より基礎的な要素を把握して効果的な関係性を導き出すという新しいデザインに向けられていたと言えよう。

3）起源の研究から進化の最前線へ

クレインがどこまで意図的に進化論を援用していたかは不明であるが、レサビーは『建築―建物という芸術の歴史と理論への入門』（1911）において、「単純な細胞から始めて最も複雑な構造物と関連づける建築学上のリンネやダーウィンによっていつか芸術形態学を手にするであろう」と、植物分類学者や進化論者の名を挙げて、建築形態が科学的に解明されることを確信している[30]。同書でレサビーは「完璧な構造的効率性を求める努力、すなわち科学的基礎に基づく合意」の必要性を説いている[31]。この頃から、『建築、神秘主義、神話』のような様式の起源に関する研究よりもその中で第二の事実として記されていた物理的法則に基づく構造的側面に主たる関心が移行したと考えられる。建築に関する普遍性を解明する対象がシンボルから構造に変わったと言ってもよいだろう。1910 年代以後のレサビーの著作では建築の構造的側面の歴史的変化を近代建築と結び付ける実践的な記述が顕著である。1920 年の論考「文明における形態としての建築」では「未来の住宅は船がデザインされるように、すべての部分において正しく機能を果たす有機体としてデザインされるだろう」と述べられている[32]。機械産業に基づく文明の最前線では、様々な可能性のある形態の中から、部分と全体の関係性が正確に機能面から説明できるものが自ずから選択

されるという発想である。レサビーは部分が全体において機能することを「機能への適合性」と呼んでいる[33]。これは、クレインに見られるような有機体理論に基づく関係性のデザインの問題を建築形態に敷衍して論じられたものであると考えられる。

起源を回顧しつつ現実社会の発展過程を分析するという進化論的アプローチは20 世紀に入ってから都市計画にも適用され、ゲデス（Patrick Geddes, 1854-1932）は『進化する都市―都市計画運動と市政学への入門』（1915）を上梓した。ゲデスは1884 年に『経済学者ジョン・ラスキン』を出版したり、1898 年にレサビーらと大学学生寮の計画をする等、アーツ・アンド・クラフツ運動とつながりのある人物である。ゲデスはコントの社会学、スペンサーの進化論研究、歴史的なユートピア論等で論じられている都市に関する内容が抽象的であることに疑義を抱いていた。『進化する都市』では、都市を「連続的生命」と見立てて、具体的状況を貫く原理を把握した上で、人類学、経済学、地理学等の社会科学の各領域を横断するように「人々」「仕事」「場所」という三つの地域的項目を実証主義的に検討した[34]。さらにこれら三つの研究・調査対象に近代生物学の概念である「有機体」「機能」「環境」を重ねて、「健康的生命は有機体と機能と環境との関係が完全であることだ」と結論づけられている[35]。これは社会的には「人々」「仕事」「場所」が向上しあうような相互作用の状態にあることを意味する。このような生物学的な必然的相互作用として捉えられる「機能」の確からしさが、近代の価値基準として浮上し、心身の健康や衛生を重視する近代生活に応答する都市を論じる際に応用されたのである。

レサビーやゲデスは近代生活に「適者生存」の原理が働くとすれば、機能性や効率性が生き残ると予見したと言えるが、まさに 1920 年代以降、機能主義を掲げるモダニズム建築が台頭することになる。ただ、それが場所の固有性を喪失する命運にあったのも事実である。科学に基づいて構造的側面を追求する中で、クレインが抽出した「条件」「気候」「民族」やゲデスが研究対象とした「人々」「仕事」「場所」といった地域的要因を捨象してしまったことがその大きな原因であろう。

4. 宗教の問い直し

1）科学と宗教の結び目

進化論をはじめとした科学的知見の拡充は旧来の宗教観にも揺さぶりをかけた。

長谷川は 19 世紀末の英国を神秘主義の社会と捉え、無神論者や世俗主義者がキリスト教の代わりに心霊主義を受け入れ、大流行していたことを指摘している[36]。心霊主義とは霊媒師が死者の魂を呼び寄せる降霊会や、催眠術といったオカルトの領域に精神世界を築くものである。こうした超自然的な神秘主義が受容される一方で、科学と宗教とが結合することに意義を見出し、宗教の起源を追求する人々も出現した。本節では、アーツ・アンド・クラフツ運動に関与した建築家の中でこの問題に取り組んだヴォイジー（Charles Francis Annesley Voysey, 1857-1941）の言説を見ていきたい。

ヴォイジーは、父親（Charles Voysey, 1828-1912：以下、C.ヴォイジーと表記）が異端の罪でヨーク主教区から放逐され、有神論教会を設立した（1871）こともあり、非国教徒的視座からもっぱら住宅の設計を行った。モリスが数多くの国教会の建築に関わったのとは対照的である。ここで有神論の概略を把握するために C.ヴォイジーの思想を確認しておこう。C.ヴォイジーは『有神論―常識という宗教』（1894）、『科学としての有神論―自然神学と自然宗教』（1895）、『全人類のための宗教』（1903）等の著作を残している。C. ヴォイジーは「有神論」を自然神学と呼び、「自然神学とは神に関する科学である」とみなし、「神」と呼ばれる知的存在の先在が人間や樹木にそれぞれの役割を与えたと見ていた[37]。「神」は「第一原因（First Cause）」とも表現され、物事が始まるところに存在するものとして捉えられている。また、有神論は啓示を求めて聖書や教会に頼るような宗教のあり方に対して否定的な立場をとる。「神」を科学的に解明するにあたって、C.ヴォイジーは人間が共通して持っていると考えられる、「理性（Reason）」「良心（Conscience）」「愛（Love）」という三つの常識的な能力に注目する。「理性」は考える力、「良心」は善悪を判断する責務の感覚、「愛」は真の幸福を与えたいという願望と定義され、「良心」と「愛」があらゆる知識の源泉を構成するという[38]。これら三つの能力は機能においても重要度においても身体的な能力よりも高次のものだとされる。これらの概念について建築家ヴォイジーも著書『芸術の基礎としての理性』（1906）で扱い、「これら三者の正しい関係と健全な働き」を期待している[39]。

「神」というすべての原因、始まりを作るものを心に持ち、上述の三つの能力を用いて考え、知識を獲得するということは「神」と共に不可知な領域をより明瞭にすることに他ならない。自然神学としての有神論は、宗教心や探求心を誘発する自然界の物質と力を把握する方法を提示したのである。

2）宗教の起源としての「第一原因」

ヴォイジーは主著『個性』（1915）の中で、「教義は進歩的な思考に対して無益である」や「第一原因に関する人間の考えは永遠に高潔かつ純粋になり続けるに違いない」と述べており、父親から影響を受けた有神論の思想が流れ込んでいることが分かる[40]。ヴォイジーは前節で見たような進化論的視点も持ち合わせていた[41]。とりわけ「適合性」という概念に注目し、論考「建築と家具の設えにおける適合性の特質」（1912）の中で次のように定義している。

> 適合性は神の法である。我々は適合性という言葉によって物質的適合だけではなく道徳的適合も意味する。[42]

この引用における「物質的適合」と「道徳的適合」とは対立するものではない。前者は材料や構造等の実在的特性への適合を指す。レサビーが「機能への適合性」と呼ぶものと同義である。レサビーはここに近代の新しい価値基準を見出していた。しかし、ヴォイジーは論考「事物の中の観念」（1909）で、「卑劣な物質主義が人間によって物に付与された精神的特質を見る目を遮っている」と物質主義の危険性を指摘している[43]。そこで重要となるのが「道徳的適合」である。先述の三つの能力を携えた個々人が「自然の法則」として「精神的特質」を捉え、制作物にその性格を付与することを意味する。「事物の中の観念」では、「精神的特質」として、「正確」「秩序」「整然」「精確」「率直」「真実への愛」「崇敬」等の観念が挙げられている[44]。これらは「固有観念（intrinsic ideas）」とも呼ばれ、多様な解釈が可能な「連想観念（associated ideas）」とは決定的に異なるとされる。『芸術の基礎としての理性』では「自然の中の神の叡知と良きもの」とも表現されている[45]。「精神的特質」は「良い」という絶対的性質を有していると言えるが、それをもたらすものが「第一原因」＝「神」なのである。「精神的特質」は教義のように人為的なものではなく神が人間に平等に与えた共通の能力を持っていれば時代や場所を超えて理解できる自然なものであり、制作物に適用することは独善的な物質主義を阻止する手立てとなると言えよう。

3）建築作品への応用

上述のような「道徳的適合」が達成された建築作品とはどのようなものか。論考「建

築と家具の設えにおける適合性の特質」から事例を見ておきたい。ヴォイジーは住宅の設計について、全体のデザインや平面計画はもとよりすべての細部まで「単純（simplicity）」と「平穏（repose）」という特質に従わなければならないという。「単純」の考え方が全体計画に適用されるというのは、「平面図と必要条件から立面を展開するということであり、前もって考えられた立面に適合するように平面図を作ることは決してない」とされる。例えば、ギリシア神殿の外観を住宅の要求に当てはめることは適合性を妨害するという。「平穏」に関わる事柄として、各部屋のプロポーション、地域の素材や条件を考慮して周囲環境との調和やリズムを守ること、大きくてどっしりとした煙突等が例示される。「長くて低い建物は安らぎと開放感を創出する」とも述べられており、「長くて低い」ことを示す水平性優位のデザインが「平穏」と関連づけられるプロポーションであることが分かる。また、煙突とつながる暖炉の火について、「炉床から立ち上がり、威厳や品位を示す」と言及されている。「威厳」や「品位」も個々人の嗜好とは関係なく感得される「精神的特質」のひとつである。

図 3 「ムーアクラッグ」外観

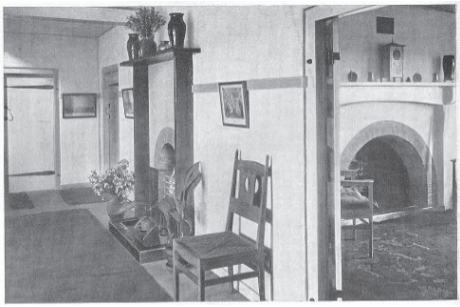

図 4 「マウントホリー」内観

図 3 は同論考に掲載された「ムーアクラッグ」という作品の外観である。白い漆喰仕上げの外壁、平面上必要な個所に設けられた切妻屋根およびドーマー窓は「単純」を体現していると言える。屋根を地面近くまで下げるデザイン、窓上部に配された水切りおよび軒の水平線、屋根の上に立ち上がる漆喰塗りの煙突には「平穏」という特質が作品化されていると考えられる。また図 4 は「マウントホリー」という作品の内観であり、「左側の暖炉の『枠』は独特である」と挿図下に説明文が付いている。左側の暖

炉の「枠」は炉床、側板、天板という単純な要素で構成されているが、着色されるとともに高さのある側板が左右のピクチャーレールを分断することによって、垂直性が強調された異質な存在になっている。こうすることでヴォイジーは人間生活にとって不可欠な火の「威厳」や「品格」を抽象的に表現したのであろう。

5. 日本への波及

モリスが「装飾芸術―その近代生活および進歩との関係」を発表した 1877 年は、明治政府が成立してからおよそ 10 年、日本においていよいよ文明開化が進められる時期に当たる。周知のように、明治時代には「和魂洋才」の価値観のもと、外来文明の制度、技術、形式は積極的に摂取するものの、西洋文明の思想的背景や精神的側面をも受容する方向には進まなかった。明治期日本に移入された建築は西洋の様式建築の折衷主義であり、モリスらが直面した「近代生活」や「進歩」の問題を踏まえた近代建築が日本において見られるのは大正時代に入ってからのことである[46]。本節では、英国の動向との関係を検討するために、日本における近代建築の成立に寄与したと考えられる伊東忠太（1867-1954）と分離派建築会[47]同人の蔵田周忠（1895-1966）による論考を取り上げる。

本稿では英国の近代建築草創期における建築様式や宗教の起源をめぐる議論の背景に進化論の学説があることを示したが、日本の建築界において建築と進化の問題が体系的に論じられたものとして伊東による「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」（1909）が挙げられる[48]。ダーウィンの『種の起源』刊行から半世紀経っているが、レサビーやヴォイジーが「適合性」概念とともに建築論を発表している時期と重なる。ただ、伊東の論考に彼らに関する言及は見当たらず、ファーガソンの建築史をベースにした記述となっている。六つの「建築進化の原則」[49]や図 5 のようなダイア

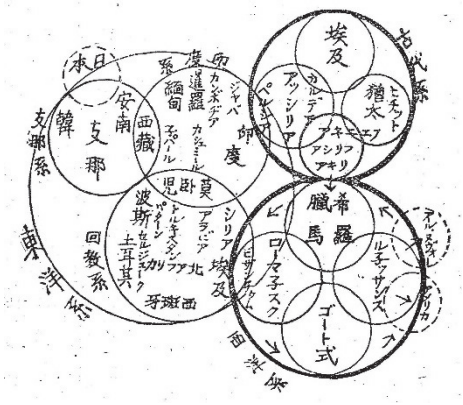

図 5 伊東忠太による建築様式の変遷図

グラムを示しながら、諸様式の連関が検討される。ダイアグラム中の点線で示される円環は、最新の事例を表しており、本文中では「アール、ヌヴォーや摩天楼の如き破天荒な創意も、よく詮じ詰めると全く無より創造したものではないことが判ります」と説明されている[50]。新奇的に見えるものにも起源があることを強調しながら、伊東がもっぱら関心を示すのは、日本建築の将来とりわけ「宗教建築に代って建築界の首領となるべき公共建築の標準」であり、図 6 が示される。「神道」と「仏教」の影響を受けた過去の日本建築が実線の円環で描かれ、そこに一部重なる形で新時代の建築が捉えられている。伊東はまた、このように「建築のスタイルは突然に発生しない」ことを主張する一方で、「勿論原始のスタイルは特発するものと認めねばなりません」と言わば起源の起源についても言及している。この「原始のスタイル」の問題が、伊東が教鞭をとる東京帝国大学の卒業生を中心に結成された分離派建築会のメンバーによって主題化されることになる。

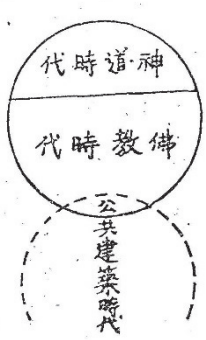

図 6　日本建築の圏（伊東）

蔵田は雑誌『建築画報』の「最近建築と原始人の心」（1924）という記事の中で、「科学は宇宙を支配する力そのものではなくて、その力を理解する一つの方法であった」と科学の存在理由を再認識した上で新しい建築の創作にあたる必要性を説く。機械文明の発展がもたらした負の側面とも言える第一次世界大戦が念頭にあると考えられる。蔵田は「人間生活、人間そのものが無性になつかしくなる」とし、「真の人間性」を感じるような境地として原始生活を持ち出す。次のように述べられている。

> 文化の或る終端に立った近代人は、あらゆる過去の経路を捨てて原始人の出発点から始めようとする。建築の努力も絵画や彫刻の運動と同じく、また原始人への憧憬を表現する。[51]

建築の問題に限定すれば、「あらゆる過去の経路」とは伊東が体系化しようとした過去の様式建築の連関を指している。それらを切り離しつつ、蔵田は方法として近代人が手にした科学を保持したまま、原始生活に見られたであろう特質を建築表現に導

入することに意義を見出している。記事の中では原始人への憧憬を示すものとして「正直さ」「自然の生活」「生命」「粗野」等が挙げられている。原始生活そのものに回帰するのではなく、「憧憬を表現する」という理想化する態度を見落としてはならないだろう。具体的な表現内容は『建築画報』における連載記事「近代英国田園住宅抄」（1925年より）および「近代独逸小住宅抄」（1926年より）によって自然と関わる住宅の問題として取り上げられることになる[52]。蔵田は当時、日本において普及しつつあった文化住宅を「自然さを欠いている」と批判する一方で、英国や独国の田園住宅に可能性を見出していた[53]。英国の事例として、モリスの自邸「レッド・ハウス」[54]は「いかにもぶっきらぼうに当時の田園に立ったのでした。それは内にこもる熱情を最も単純に率直に表現したに過ぎなかった」と紹介されている[55]。「ぶっきらぼう」「単純」「率直」という形容で捉えられているのは建築家や芸術家の作為があたかも無いかのように必然性や材料に基づいて「自然さ」が再構成された建築の様相である。「建築の無表情」とも表現されている。ここではモリスの中世主義や社会主義は脱色され、人間生活の原点に立ち返って住宅が作られているかが評価基準となっている。蔵田はヴォイジーによる「ホームステッド」という住宅作品も扱い、「真の独創とは誠実の現われをいうのだ」というヴォイジーの言葉を引用しながら、「いつも英国田園住宅に感じられる自然のままな環境への合致」を示していることを称賛する[56]。「誠実」はヴォイジーが重視する「精神的特質」のひとつであると考えられるが、蔵田はおそらく有神論の思想等に通じていなかったため、字義通り住宅が環境に対して誠実であると受け止めたのであろう。また、外観について次のように評されている。

> 緑色の屋根、白い壁、硝子窓―これだけが作る表情の少ない全体のエフェクトは、冷たい感じがしますけれどそれはよく見ているとどこか快い冷たさに変ります。[57]

4節3）での考察を踏まえれば、作品の第一印象としての「冷たい感じ」は少ない建築要素の「物質的適合」に起因し、時間をかけて感得される「快い冷たさ」はヴォイジーが唱える「単純」や「平穏」という特質への「道徳的適合」の結果であろう。ヴォイジーの思想的背景に精通せずとも「快い冷たさ」として伝わる点に時代や場所を超える「精神的特質」の普遍性が表れていると言えようか。

なお、蔵田自身は例えば「加納川邸」(1925)という住宅作品において大和棟という伝統的屋根形態を抽象化することによって田園や自然への眼差しを表現している[58]。

6. おわりに

本稿では、英国の近代建築草創期の原始性追求の諸相について、中世主義からの展開、進化論との接続、宗教の問い直しという大きく三つの論点を示すとともに、日本への波及の一端を確認した。中世主義を素地とするモリスの社会主義や有神論を理論的支柱とするヴォイジーの建築論においては、キリスト教を背景としながら道徳の再構築という課題に対して人類の「原初世界」や「第一原因」が論じられていた。他方、レサビーの建築論やゲデスの都市論では進化論の影響のもと、諸々の起源に関する科学的研究を通して見出される「機能」の確からしさが重視された。「機能」への問いには宗教や道徳の問題を介在させる必要がなかったと考えられる。しかし、このような機能を偏重するモダニズム建築に地域性を閑却する傾向があったことを振り返ると、モリスやヴォイジーらの説く道徳の回復に脱機能主義の可能性があるように思われる。それは「知ること」としての科学(science)を「善悪を知ること」としての良心(conscience)に結びつけるという語源的にも無理のない方法ではないだろうか。

日本の近代建築草創期には、中世主義や有神論等の西洋の精神的側面が広く受容されることはなく、「機能」を前面に出す欧州田園住宅等の形式的側面が評価されたと言える。そこには様式建築の忌避から生まれた「原始人への憧憬」を田園住宅に重ねる思想があり、蔵田をはじめ分離派建築会の面々は人間生活の起源としての必然性や材料に基づいて「自然さ」を再構成するという方法に帰着した。これに従えば、必然性や材料に文化的あるいは地域的差異があるとともに、科学に裏打ちされた技術の更新がある以上、常に新しい建築が創作されるはずであるが、昭和初期の建築や都市の状況はどうであったか。蔵田らが直面した現実についての考察は別稿に譲ることにしたい。

(本稿はJSPS科研費 19K04820 の助成による成果の一部である。)

---

[1] 日本の分離派建築会の創設者のひとりである森田慶一(1895-1983)は『建築論』(1978)の序章の中で、「建築世界と他の文化世界―たとえば、経済・政治・思想・宗教など―との交渉・関

連において、建築を外から見つめる必要があることは言うをまたぬ」と述べている。このように「外からの建築論」の必要性について触れられているものの、「われわれは、ここではもっぱら内からの建築論に留まることで満足しよう」との判断のもと、物理的・事物的・現象的・超越的という建築の四つの存在様態を体系化することに終始した。『建築論』が出版された1970年代は公害問題が顕在化するなど、近代化の限界が認識され始めた頃であり、近代建築の鍵概念である機能性や普遍性等に対して批判的な建築論が多くの論者によって書かれた。そういった中で森田はあえて「建築世界」の力や自浄作用を信じて「内からの建築論」を構築したと考えられるが、現代では「持続可能な開発目標」を掲げる等、他の文化世界との関係において建築を考えることが不可避である。本稿では「他の文化世界」の中でも宗教と進化論の問題を扱う。

[2] 本項の内容は拙稿「アーツ・アンド・クラフツ運動における『個性』の概念について」、第2章を要約したものである。

[3] Pugin, *The True Principles of Pointed or Christian Architecture*, p.1

[4] Ruskin, *The Stones of Venice. Volume I & II*, p.155 「過剰性」は現代社会のシステム設計に求められている「リダンダンシー（冗長性）」を連想させる。

[5] *Ibid*., p.163

[6] Morris, “The Lesser Arts.”, p.4 引用文献の表題が「小芸術」となっているのは、講演録『芸術の希望と不安』に収録される際に「装飾芸術―その近代生活と進歩との関係」から改題されたためである。当該講演は1877年12月4日に行われ、翌年には小冊子も発行された。

[7] 「パタンデザインの歴史」にファーガソンの名前は出てこないが、『世界建築史』と共通する建築物が多く取り上げられている。モリスは 1889 年にアシュビー（Charles Robert Ashbee, 1863-1942）に宛てた書簡の中で、初期ビザンチン建築の好例として“the Dome of the Rock (Ferguson)” と書いている。ファーガソンは『世界建築史』に「エルサレムの岩のドーム」の平面図や内観図を掲載しており、モリスが当該文献から情報を得ていたと考えられる。

[8] Morris, “The History of Pattern-designing.”, p.208

[9] *Ibid*., p.208

[10] *Ibid*., p.207

[11] 同時期に「文明における建築の前途」（1881）や「芸術の現状と前途」（1881）という講演も行われている。「進歩（progress）」や「前途（prospect）」といった未来への視線と中世芸術等の過去への視線を交錯させながら、モリスは『ユートピアだより』等の夢物語を発表することになる。

[12] Morris, “Architecture and History.”, p.298

[13] Morris, *A Dream of John Ball; A King’s Lesson*, p.21

[14] Morris and Bax, *Socialism: Its Growth and Outcome*, pp.29-30

[15] *Ibid*., p.31

[16] *Ibid*., p.38

[17] タイラー『原始文化』（下巻）収録の松村による解説によれば、モーガンは『古代社会』で人類が発展段階を経て、野蛮、未開、文明へと移行することや原始共産制から私有財産制へ進むことを主張した。この説はエンゲルス（Friedrich Engels, 1820-1895）の『家族・私有財産・国家の起源』（1884）にも取り入れられた。

[18] Morris, “Why Not?”, p.27

[19] 鎌井ほか『イギリス思想の流れ―宗教・哲学・科学を中心として―』、p.139 で次のように指摘されている。「ダーウィンの生物進化の学説（Darwinism）は、抗うべからざる事実を背景としているらしく思われただけに説得力があり、聖書解釈の面、とくに「創世記」の解釈に対しては

決定的な転換をせまるものであった。キリスト教界のこうむった衝撃は深かった。」
[20] ヘンダースン『ウィリアム・モリス伝』、p.24 および Glasier, *William Morris and the Early Days of the Socialist Movement*, p.164 の記述を参照した。
[21] Morris, “Some Thoughts on the Ornamental Manuscripts of the Middle Ages.”, p.4
[22] パリー『ウィリアム・モリス』、p.293 参照。
[23] 片木『アーツ・アンド・クラフツの建築』、pp.64-65 参照。
[24] Lethaby, *Architecture, Mysticism and Myth*, pref. v
[25] 初出は *The Leader* の第 3 巻第 135 号、1852 年 10 月 23 日付の記事「建築様式の起源（Origin of Architectural Types）」である。1865 年刊行の『普遍的進化の例証』収録時に「建築様式の諸源泉（The Sources of Architectural Types）」と改題されている。
[26] Rubens, *William Richard Lethaby: His Life and Work 1857-1931*, p.80 において、レサビーがスペンサーの「原始人は元来、自分が利用可能なデータに基づいて自分たちの周囲世界について合理的に推論していた」という意見に示唆を受けたことが指摘されている。
[27] Lethaby, *Architecture, Mysticism and Myth*, pp.2-3
[28] *Ibid*., p.3
[29] Crane, *The Bases of Design*, p.vii
[30] Lethaby, *Architecture: An Introduction to the History and Theory of the Art of Building*, p.8
[31] *Ibid*., p.249
[32] Lethaby, *Form in Civilization: Collected Papers on Art & Labour*, p.10
[33] *Ibid*., p.118。原語は“fitness for function” である。他にも同書において「機械的適合性（mechanical fitness）」（p.52）や「目的への適合性（fitness for purpose）」（p.163）とも表現される。『建築―建物という芸術の歴史と理論への入門』では、「機能的適合性（functional fitness）」（p.241）という用語も見られる。
[34] Geddes, *Cities in Evolution*, p.198
[35] *Ibid*., p.392
[36] 長谷川『田園都市と千年王国―宗教改革からブルーノ・タウトへ』、pp.99-102 参照。
[37] Voysey, C., *Theism as a Science of Natural Theology and Natural Religion*, pp.7-8
[38] *Ibid*., pp.2-3
[39] Voysey, C.F.A., *Reason as a Basis of Art*, p.8
[40] Voysey, C.F.A., *Individuality*, p.9
[41] Voysey, C.F.A., “Ideas in Things.”, p.116 に「進化」や「適合性」に関する次のような記述がある。「伝統や最愛の模範ではなく、当然考慮すべき条件や要求から我々の創造物を進化させなければならない主たる理由のひとつは、我々の条件や要求は常に変化しているからだ。新しい方法や素材が絶えず進化し、人間の習慣や趣味も常に変わっている。前世紀の人々にふさわしかったものが我々の時世の感覚や要求に合うとは限らない。もしも適合性が我々の時代の法則であるならば―それは自然の法則であるが―、我々の考えを既存の形態に固く結びつける必要はない。」
[42] Voysey, C.F.A., “The Quality of Fitness in Architecture and Furnishings.”, p.174
[43] Voysey, C.F.A., “Ideas in Things.”, p.106
[44] *Ibid*., p.105 同論考ではこれらの他にも「威厳」「優美」「洗練」（p.105）や「釣合」「優雅」（p.119）等の特質も挙げられている。『個性』では「崇敬」「情愛」「正義」「慈悲」「正直」「率直」「寛容」「謙遜」「忠誠」「秩序」「威厳」の観念が挙げられている（p.11）。

[45] Voysey, C.F.A., *Reason as a Basis of Art*, p.9
[46] 大正時代を近代建築の萌芽と捉えることについて、稲垣『日本の近代建築［その成立過程］（上）』、p.23 参照。
[47] 分離派建築会は東京帝国大学建築学科を卒業した石本喜久治（1894-1963）、堀口捨己（1895-1984）、山田守（1894-1966）、瀧澤眞弓（1896-1983）、森田慶一（1895-1983）、矢田茂（1896-1958）の六名によって卒業制作の展示をきっかけとして 1920 年に結成された、歴史的様式からの分離と新しい建築の芸術的な創作を唱えた集団である。のちに早稲田選科生の蔵田周忠（1895-1966）、逓信省営繕課の岡村蚊象（1902-78）らがメンバーに加わった。
[48] 伊東の建築進化論の特質については倉方「『建築進化の原則より見たる我邦建築の前途』の主旨について」に詳しい。倉方は伊東における「進化」という言葉の使用法について、「ダーウィンの進化論や、スペンサーの社会進化論の本質とは無縁であり、社会に共有された通俗的な理解と共振させるためのレトリックであることは明らかである」と論じている。本稿では、ダーウィンやスペンサーの原典における本質とは無縁な線上に、東京帝国大学における進化論受容という問題がある可能性を指摘しておきたい。伊東が東大を卒業する二年前の 1890 年に東大総長となった加藤弘之（1836-1916）は『人権新説』（1882）等によってスペンサーの社会進化論を日本社会に応用しようとした。また、同時期に工科大学教授であった辰野金吾（1854-1919）は「建築進歩の由来」（1890）や「建築の進化」（1894）と題した講演を行っている（川道ほか「伊東忠太の『建築進化論』について（上）その由来」参照）。加藤や辰野の議論を批判的に、あるいは発展的に継承し、伊東は独自の建築進化論を形成したと考えられる。
[49] 伊東「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」、pp.5-8 に記述される六つの「原則」は次の通りである。「第一 建築は材料（肉体）と意匠（精神）とより成る」「第二 材料は意匠を助成し、意匠は材料を改善し、相輔けて進化す」「第三 建築意匠を司る最大勢力は宗教なり」「第四 スタイルはスタイルを生ず、スタイルは故なくして発生又は死滅せず」「第五 次（注：原文では左）の場合にはスタイルの変化を生ず（甲）材料変化するとき（乙）意匠変化するとき（丙）強制的若しくは任意的に外部の影響を受くるとき」「第六 スタイルの変化は次（注：原文では左）の形式に於て現はる（甲）器械的混合（乙）化学的融合」「第七 スタイルの変化は突如に成ることなし若し材料の変更に由る場合には其間に所謂 Succedaneum 即ち Substitution の時代を生ず」。
[50] 上掲書、p.22
[51] 濱岡「最近建築と原始人の心」、p.8。創作活動に喜びを感じる境地は「呪われたる物質文明、爛熟せる生活様式中にはない」とゴーガン（Paul Gauguin, 1848-1903）の言葉も引用される。
[52] 堀口捨己が 1924 年に『現代オランダ建築』によってオランダの田園住宅を紹介していたことに鑑みると、蔵田は堀口と同様の関心から、堀口が対象としなかったイギリスやドイツの事例を取り上げたと考えられる。堀口は論考「建築の非都市的なものについて」（1927）で、田園の特徴を「非都市的な原始的な自然な発展」と表現し、「田園では家とは何であるかから始めることができる」ことに意義を見出した。
[53] 蔵田『近代英国田園住宅抄』、p.2
[54] 拙稿「自然と模様について―柳宗悦と英国の関係をめぐって―」、pp.41-42 参照。
[55] 蔵田『近代英国田園住宅抄』、p.17
[56] 上掲書、pp.21-22
[57] 上掲書、p.23
[58] 蔵田を含め分離派建築会の作品と田園との関わりについては、拙稿「『田園』をめぐる思想の見取り図」を参照されたい。

＜参考文献＞

Crane, Walter. *The Bases of Design*. London: George Bell and Sons, 1902.

Fergusson, James. *A History of Architecture in all Coutries, from the Earliest Times to the Present Day*, *Vol.1 & Vol.2, Second Edition*. London: John Murray, 1874.

Geddes, Patrick. *Cities in Evolution: An Introduction to the Town Planning Movement and to the Study of Civics.* London: Williams & Norgate, 1915.

Glasier, J. Bruce. *William Morris and the Early Days of the Socialist Movement*. London: Longmans Green, 1921.

Laugier, Marc-Antoine. *An Essay on Architecture*. London: Printed for T. Osborne and Shipton, 1755.

Lethaby, William Richard. *Architecture, Mysticism and Myth.* New York: Macmillan & Co., 1892.

Lethaby, William Richard. *Architecture: An Introduction to the History and Theory of the Art of Building.* London: Williams & Norgate, 1912.

Lethaby, William Richard. *Form in Civilization: Collected Papers on Art & Labour*. London: Oxford University Press, 1922.

Morris, William. *A Dream of John Ball; A King's Lesson*. London: Kelmscott Press, 1892.

Morris, William. "The Lesser Arts." "The History of Pattern-designing." "Architecture and History." *Hopes and Fears For Art, Lectures on Art and Industry: The Collected Works of William Morris, volume XX II*. Edited by May Morris. London: Longmans Green, 1914.

Morris, William and Bax, E. Belfort. *Socialism: Its Growth and Outcome*. London: Swan Sonnenschein & Co., 1893

Morris, William. "Some Thoughts on the Ornamental Manuscripts of the Middle Ages." *The Ideal Book; Essays and Lectures on the Arts of the Book.* Edited by William S. Peterson. California: University of California Press, 1982.

Morris, William. "Why Not?" *Political Writings: Contributions to Justice and Commonweal 1883-1890*. Edited by Nicholas Salmon. Bristol: Thoemmes Press, 1994.

Pugin, Augustus Welby Northmore. *The True Principles of Pointed or Christian Architecture.* Edinburgh: John Grant, 1895.

Rubens, Godfrey. *William Richard Lethaby: His Life and Work 1857-1931.* London: The Architectural Press, 1986.

Ruskin, John. *The Stones of Venice. Volume I & II*. Boston: Aldine Book Publishing Co., 1890.

Voysey, Charles. *Theism: or, the Religion of Common Sense.* London: Williams & Norgate, 1894.

Voysey, Charles. *Theism as a Science of Natural Theology and Natural Religion.* London: Williams & Norgate, 1895.

Voysey, Charles. *Religion for All Mankind Based on Facts Which Are Never in Dispute.* London: Longmans Green, 1903.

Voysey, Charles Francis Annesley. *Reason as a Basis of Art*. London: Elkin Mathews, 1906.
Voysey, Charles Francis Annesley. “Ideas in Things.” *The Arts Connected with Building*. London: B. T. Batsford, 1909.
Voysey, Charles Francis Annesley. “The Quality of Fitness in Architecture and Furnishings.” *The Craftsman*, Nov., pp.174-182, 1912.
Voysey, Charles Francis Annesley. *Individuality*. London: Chapman and Hall, 1915.
伊東忠太「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」『建築雑誌』、第 265 号、pp.4-36、1909
稲垣栄三『日本の近代建築［その成立過程］（上）』、鹿島出版会、1979
片木篤『アーツ・アンド・クラフツの建築』、鹿島出版会、2006
鎌井敏和ほか編著『イギリス思想の流れ―宗教・哲学・科学を中心として―』、北樹出版、1998
川道麟太郎、橋寺知子「伊東忠太の『建築進化論』について（上）その由来」『日本建築学会計画系論文集』、第 525 号、pp.281-285、1999
倉方俊輔「『建築進化の原則より見たる我邦建築の前途』の主旨について―伊東忠太『建築進化論』の特質に関する研究 その1―」『日本建築学会計画系論文集』、第 581 号、pp.191-195、2004
蔵田（濱岡）周忠「最近建築と原始人の心」『建築画報』、第 15 巻第 3 号、pp.8-9、1924
蔵田周忠『近代英国田園住宅抄』、建築画報社、1926
パトリック・ゲデス『進化する都市―都市計画運動と市政学への入門』、西村一朗訳、鹿島出版会、2015
杉山真魚「アーツ・アンド・クラフツ運動における『個性』の概念について」『日本建築学会近畿支部研究報告集』、第 55 号計画系、pp.777-780、2015
杉山真魚「自然と模様について―柳宗悦と英国の関係をめぐって―」『ガーデン研究会ジャーナル 4』、pp.37-46、2018
杉山真魚「『田園』をめぐる思想の見取り図」『分離派建築会：日本のモダニズム建築誕生』、田路貴浩編、京都大学学術出版会、pp.282-300、2020
エドワード・B・タイラー『原始文化』（上下巻）、松村一男監修、奥山倫明ほか訳、国書刊行会、2019
長谷川章『田園都市と千年王国―宗教改革からブルーノ・タウトへ』、工作舎、2021
リンダ・パリー『ウィリアム・モリス』、多田稔監修、河出書房新社、1998
フィリップ・ヘンダースン『ウィリアム・モリス伝』、川端康雄ほか訳、晶文社、1990
ウィリアム・モリス『社会主義―その成長と帰結』、大内秀明監修、川端康雄監訳、晶文社、2014

＜図版出典＞

図 1　Morris, *A Dream of John Ball; A King's Lesson*, frontispiece

図 2　Crane, *The Bases of Design*, title page

図 3　Voysey, C.F.A., “The Quality of Fitness in Architecture and Furnishings.”, p.176

図 4　*Ibid.*, p.178

図 5　伊東「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」、p.20

図 6　上掲書、p.23